



連載 I  
当財団専門委員  
私の研究と観光  
第 8 回

# あらためて考える「観光は人との出会い」

北海道大学 観光学高等研究センター センター長・教授 西山 徳明

## 1. 竹富島での三村研究室との出会い

私は、「人を楽しませる建築をつくりたい」と建築学を志し、学部3年生の夏まではひたすら製図板に向かってドローイングに励んでいた。しかし冷夏であったその8月、夏を求めて沖縄に出かけ、流れ着いた竹富島で偶然、母校の京都大学建築学科三村浩史研究室の集落景観・観光調査に遭遇する。南国の陽射しの中で咲き乱れる花々と赤瓦屋根の木造建築群が織りなす美しい景観を調査し、その持続性について研究するというような分野が身近にあることを初めて知った。50年も経てばお払い箱になるコンクリート建築の設計に、折しも行き詰まり感を抱いていた私に、その旅が、進むべき研究の道を教えてくれた。

竹富島での最初の現地調査は、1985年1月、学部生として単独乗り込んだ伝統的建造物群保存対策調査であった。が、現実には甘くなかった。3週間の踏査で改めて集落景観の魅力を知り、その保存の重要性を島の人々に問いかけてみるが、皆、翌日来る観光客からどうお金を稼ぐかに躍起で、若い学生の声などには耳を貸

さない。「観光」を勉強して島の将来を語り、彼らを振り向かせることができれば、耳学問の町並み保存運動など「絵に描いた餅」で終わることを実感した。大学に戻り、さっそく景観研究だけでなく観光研究もしたいと指導の三村先生に申し出たが、「観光研究者では飯は食えない」と取り付く島もなかった。

しかしこの時期、三村研究室には、キプロスからの博士課程留学生で、地理学の専門からツーリズム研究をしているNicos J. Rossidesという気鋭の研究者がおり、ハワイ・沖縄・キプロスを事例に「地域同化能力 regional assimilative capacity」という新概念を開発して観光インパクト研究を進めていた(1984京都大学博士申請論文「The role of tourism in regional development and alternative planning strategies with special reference to island contexts」)。Nicos氏は、観光人類学のバイブルとも言える「HOSTS AND GUESTS」を、おそらく初めて日本に持ち込んだ研究者であり、私は、氏の地理学からする物理的で緻密なアプローチと人類学的な地域コンテクストの分析手法に大きく影

響を受け、さらに観光研究への思いを強くしていった。

## 2. 観光研究の入口にあったリゾート法

そんな中、1987年初春に総合保養地域整備法(いわゆるリゾート法)が世に出た。あまりに奇抜な法律であったため、研究室の先生、先輩方もその何たるかを掴みあぐねていたのである。三村先生より条件提示があった。「西山君、旅費を出してあげるから一週間ほど霞ヶ関に行ってください。そこでリゾート法とは何かを見極め、関連資料を段ボール2箱分手に帰参できれば、観光研究を許す」と仰るのである(これは「観光地づくりオーラルヒストリー第8回三村浩史氏」を読み、先生の得意手法であることが最近分かった)。右も左も分らないまま上京し、関係がありそうな当時の国土庁、建設省、労働省、総理府、JNTO、余暇開発センターなどを手当たり次第に訪ね歩き、猛烈に、しかし付け焼き刃の誇りを免れない勉強をして、最後に所轄の環境庁担当課の(おそらく)係長に飛び込みで面談を頼んだ。慥然とする相手に20

分ほど、リゾート法というのはほとんどでもない悪法ではないのか?と、できたての仮説をまくし立てる私に、その係長は黙っていた口を開いた。「その通りです」と言うや否や、そのまま、この法律が国土を滅ぼすいかなるメカニズムを有しているかについて、1時間以上をかけ、詳細に必死に教えて下さったのである。段ボール2箱も何とか埋まり、京都に帰ってゼミで報告すると、無事、観光研究に取り組むことを許された。

### 3. 観光地域計画研究の立ち上げ

研究室では、博士課程1年生であった私がリーダーとなり、修士の後輩3人とともに「観光地域計画グループ」という小ゼミを立ち上げ、岐阜県白川村、妻籠宿・馬籠宿、湯布院、そして竹富島などに押しかけ調査に出かけ、アンケートとヒアリングにより、地域主体の観光開発(今で言う自律的観光)とはいかなるものかをがむしゃらに探求した。竹富島がリゾート・ブームの中で食い物にされないために、まずは敵を知るべきと、沖縄じゅうの高級リゾート・ホテルを(民宿に泊まりながら)片っ端から訪ね、ホテル・マネージャーや関係する地元事業者等にヒアリングを重ね、そこから得られた数多くの失敗・成功例から、地域がリゾート・ホテル開発と渡り合う方法、可能性について学んだ。

やがて信頼を得始めた私たちの研究チームに、三村先生が依頼を受けた先端課題をもつ受託事業が舞い込むようになった。伊勢松阪(1988)、アメリカ・サンベルト地域のリゾート

調査(1989)、与那国島観光振興基本計画(未刊行1990)、岩村まちづくり調査(1990)、堺市観光振興基本計画(1991)などのプロジェクト研究から、成長管理政策、PPP官民協働、モデルカルチャー、エコミュージアムといった今日の観光研究にもつながる重要なキーワードを見出すことができ、また学生ながらにプロジェクトを回す術を覚えたことは貴重であった。

1992年に教員として最初に九州芸術工科大学(現在の九州大学芸術工学部)に着任してからは、しばし観光研究から遠のき、故宮本雅明先生(日本建築史/都市史)と共に、伝統的建造物群保存地区に関する研究と社会実践に没頭した。

### 4. 国立民族学博物館で学び北海道大学へ

私の観光研究に関する次の大きな転機は、1997年に、(またも竹富島で)石森秀三先生(当時は国立民族学博物館教授)と出会ったことであり、1998年から約10年間、客員教員として国立民族学博物館で観光に関する共同研究会に参加(後に主催)した。30回以上開催されたこの共同研究会において、観光に関わるあらゆる分野の研究者、実践家の方々と出会い、エコツアーリズム、エコミュージアム、自律的観光資源マネジメント、文化遺産国際協力などの重要概念の意味を深く勉強できた。

2010年より研究活動の場を北海道大学観光学高等研究センターに移し、今は、CBT

(community based tourism)やDMO研究の世界的な潮流を読みつつ、国内の様々な自治体との包括連携に基づく観光地域計画に関する研究と実践、およびJICA Aとの共同による途上国での観光開発国際協力を柱として観光研究に取り組んでいる。こうしたCBTやDMOといった現代の観光研究を主導する概念も、新たに生まれ出てきたものではなく、これまで述べてきたような町並み保存運動やエコツアーリズム、エコミュージアム、成長管理、PPPといった研究蓄積が総合化された現時点での到達点と捉えられなくもない。

まだまだ観光研究の道は展開しそつである！  
(にしやま のりあき)

西山 徳明 (にしやま のりあき)

1961年福岡県生まれ。京都大学工学部建築系学科卒業、同大学院修了。博士(工学)。九州芸術工科大学助手・助教授、教授、九州大学教授を経て、2010年より北海道大学教授、公職として、文化庁文化審議会第三専門委員会(文化的景観)/歴史文化基本構想検討会、国交省国土審議会北海道開発分科会計画推進部会委員、札幌市/白川村景観審議会会長、北海道景観審議会委員、萩市/竹富町伝統的建造物群保存審議会等委員、UNWTOスペシャルアドバイザー、JICA課題別支援委員会(観光セクター開発分野)委員、フイジー、ヨルダン、ジンバブエ、ペルーなどで観光開発国際協力事業を展開中。



レпка/フィジーの世界遺産管理プロジェクトのメンバーと白川郷で(後列右から2番目が筆者)